

掌編小説

故郷

高田三郎

故郷の町に私が久し振りに足を下ろしたのは、出張帰りに台風で足止めされたためであった。

広島で用事を済ませて帰るため予約していた飛行機は欠航となった。夜の内を通り過ぎるかと思われた大型の台風は、朝になっても瀬戸内海を横切ったばかりで、兵庫から京都にかけて北上していた。飛行機は、昨日午後から欠航が続いたため機材不足で飛ぶ目途が立っていないと地方テレビが報じていた。新幹線は始発から走っているというので、ホテルから駅に急行しそれに乗りこんだ。

山陽新幹線はトンネルが多いので、日頃から、景色を眺めるより目をつぶって考え事をすることが多い。その日も、そうしていると、

ふと、昨夜見たテレビ番組が脳裏に甦った。
番組では、東北大震災に伴う原発事故で移
住を余儀なくされた人たちを取材し、住んで
いた町に帰りたいたいという人々の多様な心理を
追っていた。番組の最後に、室生犀星の生い
立ちや東京での放浪を当時の写真と寸劇で紹
介したあと、「ふるさととは遠きにありて思ふ
もの、そして悲しく歌ふもの：：」という詩
の朗読が流された。そして、この詩は、犀星
が一時帰郷して、また東京へ旅立とうとした
ときの心を歌った詩である、というナレーシ
ョンが流された。

私は、かねてより、この後につづく、
「よしや

うらぶれて異土の乞食かたぬとなるとても
帰るところにあるまじや」

を理解できずにいた。帰ってこそふるさとで
あろうし、ふるさとはたとえ乞食であれ迎え
入れてくれる母親のような包容力を持ってい
るものだ、と私には思えるのであった。

トンネルを抜け窓外を流れる竹林の丘を眺めながら、そのことをまた反芻している、自分が郷里にしばらく帰っていないことに思いがゆき無性に帰りたくなつたのであつた。それは、この初夏にあつた参議院選挙に、高校の級友が立候補し落選したことを機に、時々、襲つては消えていた心持ちだつた。

広島を八時過ぎに発つた「のぞみ」は、京都で乗り換えると、郷里の町には昼前後に着くはずである。その友人を急襲して会えるかどうか分らないが、会えれば幸い、会えずとも墓参りくらいは出来るとその気になつていた。母親が、一年先に逝つた父親を追うように亡くなり、三回忌をすませ、兄貴が住み家を引き継いで以来、四年ぶりの帰郷になる。

私の手帳には、郷里の知人の電話番号までは書き写してなかつた。駅に降り立つと、まず真つ先に構内の電話コーナーを探した。その場所はすぐに分つたのだが、個人別電話帳

に彼の名前は無かった。天井を仰ぎながら、思い立って母校の同窓会事務局を訪ねてみることにした。

私は、高校時代、駅の南側に家があり、北側にある高校まで自転車で通学していた。小さいときから野球が好きで、高校、大学と野球に明け暮れていた。時々甲子園にも出る県立高校だったが、私の時代には、残念ながら甲子園出場は果たせなかった。

駅から先の通学路をたどって母校を訪ねてみることにした。母校は、城跡を回って、歩けば十五分程の距離にある。今まで、郷里に帰っても、実家に直行してばかりで、城の周辺にはついぞ足が向かなかった。

空には台風の名残の雲がうねり風が吹きついていた。駅前の街並みは随分近代的なビル街に変わっていた。勿論、街中には高校時代からの建物など残存するはずもなかった。城跡に至ると、ただひとつだけ、見覚えのある建物が石垣の脇に建っていた。教育会館で

あった。そこから見える城跡の石垣と土手、堀の水だけは当時とほとんど変わらないものに思われ、しばし眺め入った。

コンクリートの校舎は住宅街に当時とほとんど変わらず立っていた。正門から入ると、午後の授業が始まっている時間帯なのでひっそりしている。校舎の陰からグラウンドが見える。私が練習に明け暮れた野球場はそのグラウンドとは違い、当時は、自転車で十分ほど走った田圃の中にあつた。一階の隅の音楽室からはピアノの音が小さく聞こえてきた。その音に誘われながら敷地の隅に建つ同窓会館に向かった。

玄関のドアを空けると事務室は二階との案内書きがあり、階段脇には、私たちの時代に活躍した美術の教師による大きな油絵が掛けられていた。ノックすると女性の声が迎え入れてくれた。

「あのう、私は高田三郎と申しまして、五五期の卒業です。で、恐れ入りますが、友人の

住所、電話番号を教えてください。だきたいんですが……」

「はあ、あの、折角なんです。が、個人情報はお見せできないことになってるんです」とその二十歳前後と見える女性が応えた。

頭をガンと打たれた気がした。私は、そういう時勢になっていくことは百も承知だったはずなのだが、同窓会までもがこうなっているとは不覚にも気がつかなかったのである。「あつ、やっぱりそうなんですか。茨城県か

ら来たんですが、何か、良い方法はありませんかね」

「はあ……、お友達に、同窓会名簿を見せて頂くとか……」

私は、一瞬、この馬鹿者めが、と腹の中で吐き捨てたが、それを口にするわけにいかない。

「参ったなあ」と小さな声を発した。

「遠くからご苦労様ではございますが、総会で名簿の利用法がしっかり決められておりま

して、どうしようもありませんのです」

私は、母校を後にし、来た道を逆にたどり城の堀端を歩いた。空は広く青空に変わっており、夏の終わりの陽光が石垣の上で楠の葉を煌めかせていた。住めば都というが、現代は住めば故郷ということかも知れない、という想念が沸いた。

お堀では、時々吹き来る風にさざ波が群れて水面を走った。と、ふと、犀星の「遠きにありて思ふ」心が理解できる気がした。